

その日

柏崎市立高柳中学校 一年 今井 郁孝

分からなかつた。すべてが分からなかつた。ただ、頭より先に体がうごいて、身をかくしていたのだ。

十月二十三日、新潟県中越地方を大きなゆれがおそった。ぼくはその時、母とともに家にいた。その時、近づいてくることも知らず、ぼくはテレビを見ていた。時がたつ。

「ドーン」

大地がものすごい音とともにはげしくゆれた。突然のことだ。ぼくはすかさずおこたつの中にもぐり、母は、台所からいままできいたこともないような悲鳴をあげながら、僕におおいかぶさるようになって入って来た。このゆれがひき、顔を出してみると、そこにいつもの家の景色はなく、どこまでも続く闇の世界だ。た。ラジオと、懐中電灯と、てくるぬい。母は静かに言うことだ。二階に

むか、た。ほくは恐怖と必死に戦いながら、
一人、考えていた。

「親戚は大丈夫だろうか、友達は、出張の父
は、いや、日本人たちはは。」

考えたくはないのだが、死という言葉が頭
の中をうろつく、そんなことを考えていると、

目から自然と涙があふれてきた。

二階から、母が帰ってきた。

「ラジオつけてみよう。」

ふまえてみる手で「チャンネル」を回した。

「えーくりかえし放送します。新潟県の方で
非常に大きな地震がありました。」

信じられなかった。地震とはこのような恐怖
怖を味わう物なのだろうか、しかし、この後

からきた消防団の人たちの話を聞くと、やはり
地震ということだった。もうひとめをみるを

えなかつた。

余震が続くなか、母と二人で身をよせあ

ていた。もうひとめをみる時がたつた。もう
いと母が、「電話をかけてみましょう」と言

った。僕はケータイをとり、父の元へかけた。
「もしもし」

「父ちゃん。大丈夫かい」
「なんとかない、そのちは」

「うん、こっちも。うめああああ」

再びはげしい余震がおそった。

「大丈夫かい、いいかい、まあ母さんのいうことをきいて、その家を出る」

父はそう言うなり電話をきった。

母とぼくは決意した、家を出ることを。母

は物をバックにつめている。ぼくもその手伝

いをした。最後に、亡くなっただ祖父、祖母の写真を大切にバックに入れた。「必ず帰って

きますぬ」そう仏壇におがむと、ぼくは家を

あとにした。

車の中に非難することにした僕たちは、駐車場に行った。そこにはすでに、たくさん

近所の方が集まっていた。僕は、この人たちは

は生きているんだ、と、いこう喜びと、こみから

への安心感をいだき、眠れない一夜を過ごした。